

東南アジア研究センター 昭和40年度第2・四半期報告

東南アジア研究センターの7月から9月にいたる昭和40年度第2・四半期の活動状況を要約報告する。

調査研究計画は、暑中休暇の利用ということもあって、きわめて活発にすすめられた。マレーシア中核調査としては、前年度にひきつづき、アロール・ジャングス村を、先発の坪内良博研修員（文）とともに口羽益生助教授（龍谷大学）・前田清茂講師（天理大学）・梅田輝世（関西学院大学大学院学生）、さらに宗教班の藤本勝次教授（関西大学）の加わったチームが調査、9月末をもって終了して、キャンプをとじた。前田成文大学院学生（文）はジョホール州エンダウにおいて原マレー人村落に住みこんでの調査を開始した。社会科学部門の政治班、猪木正道教授（法）はインドシナ3国を歴訪した。つぎに、自然科学部門のうち、農業班として、渡部忠世助教授（京都府立大学）はタイ北部でモチ米の、福井捷朗大学院学生（農）はタイ南部でイネの植物栄養学的研究を開始した。川口桂三郎教授（農）は水田土壌調査のためフィリピン・タイ・マレーシアに、小林達次助手（農）は窒素固定性微生物調査のためタイに、河津一儀助手（農）は魚毒成分をもつムラサキシキブ採集のためマレーシアを旅行した。沢田敏男教授（農）は南勲助教授（農）とともに、タイの広域水利事情を調査。小林章農学部長はイラン・インド・タイにおいて乾燥地帯と湿潤地帯との果樹作を比較するとともに、研究センター管理委員長の資格において、研究センターの現地での活動状況を視察した。医薬班としては、タイにおいて、東昇教授（ウイルス研）がウイルス研究、寺松助教授（結核研）が結核外科指導にあたった。地学班としては、鈴鹿恒次・谷口敬一郎両助教授、港種雄・入江恒爾両講師（工）からなるチームがマレーシアの鉱物資源を調査した。さらに、予備調査のため、吉井良三教授（教養）・今立源太良助手（東京医科歯科大学）・酒井敏明大学院学生（文）がインドネシアにおもむいた。なお、この期間の**バンコク連絡事務所**の責任者は、寺松助教授である。

養成計画のうちの、**スポークン・ラングエージ・プロジェクト**として、石井米雄助教授が9月下旬からタイ語コースを開講した。

交流計画として、9月17日～19日に、農林省・海外技術協力事業団と共催、比叻山ホテルで、「水資源の農業的利用にかんするシンポジウム」をもった。また、チュラロンコン大学カセム政治学部長を数日招待して、研究会を開いた。その他、多くの外国人学者の来訪をみている。

図書・出版両計画も、順調にすすんでいる。とくに、本年度下半期には10点余の出版をみる予定で、目下その準備に大わらわである。

最後に、この7月には専任助教授に石井米雄（外務事務官）、専任助手に飯島茂（農・助手）と萩野和彦（農・奨学研修員）、事務官に山本久（庶務部）・森健二（薬）が任命され、ここに一応センター人事が整備され、**官制化**の内容が整ったことを報告しておく。

1965年9月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍